

「高等学校芸術科音楽Ⅰ」における鑑賞教材作りの視点

—生涯にわたる自発的な音楽鑑賞を目指して—

松野 美樹

(修士課程 教育学研究科 芸術教育専攻 音楽科内容学領域)

筆者はこれまでに、「クラシック音楽ってよくわからない」といった声をよく耳にし、クラシック音楽がなかなか聴かれない現状を目の当たりにしてきた。これは、かつて習い事や部活動で音楽経験を積んだ者や、本学の音楽教育を専攻している学生にも及んでいる。このことから、クラシック音楽を自発的に鑑賞するようになるためには、表現活動や音楽の知識・理解とは異なる、鑑賞のための教育が必要とされているのではないかと考え、研究することとした。これには様々なアプローチが考えられるが、筆者は大学院修了後に高等学校の教員となることが決まっているため、主に担当する「高等学校芸術科音楽Ⅰ」における鑑賞教材の視点から研究を進めた。現行学習指導要領において、「生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てる」ことがこの教科の目標であることに鑑み、学校教育課程における音楽教育を終えた後の生涯にも続く自発的な音楽鑑賞態度の育成をこの研究のテーマとした。

まず第1章では、学校における音楽鑑賞教育の調査を行い、音楽鑑賞教育のあり方や問題点を考察した。その結果、限られた授業時間内に、主体的活動を含めながら指導すべき内容を教えることが困難であり、短い時間で高い学習効果が得られる教材を見出す必要性が明らかになった。

次に第2章では、生涯にわたる自発的な音楽鑑賞を促すためには、どのようにはたらきかけることが効果的かを探るため、高校1年生と、学校教育課程における音楽を修了した大学生を対象にクラシック音楽や鑑賞の授業への意識調査を実施した。その結果、以下のことがわかった。

- ①高校生はクラシック音楽にネガティブなイメージを持っていない
- ②クラシック音楽を聴かないのは、きっかけがないだけ
- ③高校生がクラシック音楽を鑑賞するきっかけは、音楽経験より、音楽についての思いや考えを共有することによる
- ④鑑賞の授業は「楽しい鑑賞の時間」であり、自発的な音楽鑑賞態度を育成する学習には到達できていない
- ⑤自発的なクラシック音楽鑑賞態度を養う教育は学校教育課程にあるうちに行うべき

①～⑤より、自発的な音楽鑑賞態度を育成するには、自分なりの思いや考えを持ち、伝えるための学力と、それを共有したいと思える音楽への興味が必要であると考えた。

これらを受けて第3章では、自発的な音楽鑑賞態度を育成するために効果的な教材と筆者が考える「鍵盤楽器の歴史」の授業を実際に観察し、教材作りの視点を考察した。この教材は学習指導要領における指導事項を多く満たし、短い時間内で高い学習効果が得られることや、授業内に仲間同士での共有が自然発生しており、自発的な音楽鑑賞態度の育成が期待できると考えた。

以上を踏まえて、これからの高等学校芸術科音楽Ⅰにおける教材作りの視点をまとめた。教材を選択する際には、生徒同士が音楽についての思いや考えを共有し合えるかを考えることが不可欠となる。共有したいと思える興味の入り口は、生徒にとってなじみ深い音楽・楽器等の中に「知らなかったこと」が含まれるものや、これまで学習してきた他教科の内容とつながるものである。また、音楽そのものの好みによる興味は多種多様であるが、音楽経験者や音楽鑑賞を行う生徒であるからといって必ずしも音楽的な観点から興味を持つとは限らず、音楽経験のない生徒や音楽鑑賞を行わない生徒でも、音楽的な観点から興味を持つということに留意する必要がある。